

第18回（平成29年度）八戸工業高等専門学校評議員会（外部評価委員会）記録

1. 目的 本校における教育・研究の質の向上及び業務運営の改善・効率化に関する目標を達成するための基本的な計画に関する重要事項について、外部の有識者による評価を行い、本校の教育・研究及び業務運営の改善に資する。

2. 日時 平成29年12月5日(火) 13時30分～16時50分

3. 場所 八戸工業高等専門学校 大会議室

4. 評議員 (五十音順)

| 氏名 | 職名 | 備考 |
|------------------------|---------------------------|----------------------------|
| いけ だ かず お 池 田 和 夫 | アルバック東北(株) 代表取締役社長 | 代理 取締役 統括本部本部長 宮本 信介 |
| いし ばし さとる 石 橋 理 | (株)青森銀行 執行役員地区営業本部長 | |
| いし ふじ せい えつ 石 藤 清 悦 | (株)デーリー東北新聞社 取締役編集局長 | |
| おお さわ かず み 大 澤 一 實 | 弁護士法人たいよう総合法律 経済事務所 代表 | |
| おお ひら とおる 大 平 透 | 八戸市副市長 | |
| か せ たかし 嘉 瀬 卓 | 八戸市立第三中学校 校長 | |
| か とう ひろ お 加 藤 博 雄 | 弘前大学 大学院理工学研究科長 | |
| さか もと よし のり 坂 本 禎 智 | 八戸工業大学 学務部長 | |
| よし だ ふ み お 吉 田 富三夫 | 八戸商工会議所 事務局長 | |

5. 学校関係者

| 氏名 | 職名 |
|---------|-----------------------|
| 圓 山 重 直 | 校 長 |
| 赤 垣 友 治 | 企画担当副校長 |
| 武 尾 文 雄 | 副校長 (教務主事) |
| 河 村 信 治 | 副校長 (学生主事) |
| 中 村 重 人 | 副校長 (寮務主事) |
| 南 將 人 | 副校長 (専攻科長) |
| 松 本 克 才 | 副校長 (研究担当・地域テクノセンター長) |
| 工 藤 憲 昌 | 副校長 (総合情報センター長) |
| 菊 地 康 昭 | 総合科学教育科長 |
| 釜 谷 博 行 | 電気情報工学コース長 |

| | |
|---------|-----------------------|
| 長谷川 章 | マテリアル・バイオ工学コース長 |
| 藤原 広和 | 環境都市・建築デザインコース長 |
| 阿部 恵 | 国際交流センター長 |
| 矢口 淳一 | 相談室長 |
| 戸田山 みどり | 男女共同参画委員長 |
| 丸岡 晃 | 地（知）の拠点整備事業（COC）推進責任者 |
| 笹垣 義美 | 事務部長 |
| 深田 浩一 | 総務課長 |
| 宇野 裕之 | 学生課長 |

6. 陪席者

- ・八戸工業高等専門学校 後援会会長 小田 良広
- ・八戸工業高等専門学校 同窓会副会長 榎本 潮

7. 日程等

一. 開 会

[深田総務課長の進行により開会]

二. 日程説明

[深田総務課長から、配布資料の確認及び本日の日程について説明があった。]

三. 校長挨拶（出席者紹介）

[圓山校長から挨拶と、評議員、陪席者及び学校関係者の紹介があった。]

四. 議 事

1. 八戸工業高等専門学校の教育・研究の現状説明及び質疑応答

[八戸高専からの現状説明のため、引き続き深田総務課長が進行]

(1) 八戸高専の最近の状況について・・・・・・・・・・【校 長】

資料の「八戸高専の最近の状況について」に基づき、圓山校長から説明があった。

(2) 八戸高専自己点検・評価について・・・・・・・・・・【認証評価対応委員会委員長】

資料「八戸高専における自己点検・評価への取り組み」及び「平成29年度 八戸高 自己点検・評価表」に基づき、武尾認証評価対応委員会委員長から説明があり、それについて、評議員からの質問と本校からの回答があった。

池田評議員代理（宮本） 宮本です。質問させていただきます。自己点検・評価の外部評価についてですが、自己評価は観点ごとにされていますが、外部評価は基準ごとでよろしいでしょうか。

学校（武尾認証評価対応委員会委員長） はい、我々の方としましては基準ごとに、更に視点、

それから観点という風に詳細に分けて、それぞれにエビデンスを揃えて評価をしておりますが、評議員の皆様には基準という大きな括りごとに、基準1のA、B、C合わせて一つの枠になっておりますので、ここで一つの評価の点数という風に、基準ごとに評価を頂ければと思っております。

池田評議員代理（宮本） 分かりました。ありがとうございます。

(3) 地（知）の拠点整備事業（COC）について・・・・・・・・・・【事業推進責任者】

資料の「地（知）の拠点整備事業（COC）について」に基づき、丸岡事業推進責任者からCOC/COC+の概要および実施状況について説明があり、それについて、評議員からの質問と本校からの回答があった。

池田評議員代理（宮本） 色々なイベントをこれからおやりになるというご説明がありましたけれども、そのイベントを何時どこでやるかっていうのは、ホームページを見ないと分からないという状況なのでしょうか。

学校（丸岡 COC 事業推進責任者） 色々な広報活動をしておりまして、ホームページ以外のメディア等でも確認することは出来ます。中学生対象の公開講座なんかは、各中学校に公開講座の案内文書を通知したりしております。だいたい中学生対象の公開講座が多いのですけれども、そう言ったところから情報を知るというケースが多いのではないかと思います。

池田評議員代理（宮本） もし今後可能であれば、中学生の親御さんもそういう情報知ってアドバイスなり行ってみたらとか、あと、ほかの一般の企業の方とかも出られるようなものがあれば出ると思いますので、メールマガジンとは言いませぬけれども、メールで何か案内が出せる仕組みがあると非常に良いなと思いました。

八戸IP、八戸インテリジェントプラザさんの方で高度技術研究センターというところがありますけれども、あそこは、会員以外にも、青森県南地方の企業さんの情報を持っていて、色々なイベントとか、セミナー、講習会等について、メールで結構前から案内していただいています。それで、それからホームページ見て応募しようかなということが、結構私サイドとしては多いです。なかなか、直接そのホームページに入って見るということは、平日頃しないと思います。何をやっているのか分からないので。

そういう意味で、そういうメールニュースで、何処かにお願いして出してもらおうということも、有った方が宜しいのではないのでしょうかという意見です。

学校（丸岡 COC 事業推進責任者） 八戸市の公報等で案内等はしていますが、メール等での案内、ダイレクトメール等の案内はしていません。

池田評議員代理（宮本） メールの方が、効果が非常に有るんですね、登録している企業さん全部に流していただけるので。色んなところから注目をすごく浴びるので、単に広告

出していますとか学校に通知していますよって言うても、そこに関与していない人は全く分からないので、出来ればそういうことも考えておいた方が活性化されるのではないのでしょうかという参考意見でした。

学校（丸岡 COC 事業推進責任者） ありがとうございます。

（４）平成３０年度４学期制について・・・・・・・・・・・・・・・・・・【校 長】

資料の「八戸高専 ４学期制の見直しについて」に基づき、圓山校長から説明があった。

加藤評議員長 こういう風にした（４学期制を見直した）場合の先生方の負担というのは、どういう風に増えるのでしょうか。

学校（圓山校長） そこも非常に重要な問題でございます。例えば、この演習を真面目にやると５０人要りますと言われて、それは出来ない。今、そういう風なカリキュラムを作っていますが、当然、これ一般教養の先生方の科目なのですがコースの先生方にもご協力をいただきます。

それから、演習なので学生達をこう指導するというのではなくて、クラスに分けて同じ問題を解かせて同じように解答してやるということで、先生方に負担が無いように、極力負担が無いようにする。

それから、ちょっと予算がどこから出てくるか問題なのですが、色々なですね、出席確認とか問題をエクセルに入れるとかというのは、TAを使って先生方の負担がなるべく少ないようにする。

それからもう一点、秋学期の一つの目標は先生方の研究時間を作るということでございます。実際にやってみると全然時間が無くてひどかったんですが、これは先ほど言いましたように、指導についてもアドバイザーなので、先生が教えるということはありませんので、複数の先生で担当して、それで、学会とかある時には、休むんじゃないですけどもその学会に専念したり、研究に専念したり、少なくとも秋学期の半分は、先生方は教育から外れられる時間を何とか捻出したいということで、今のカリキュラムの構想を考えているところでございます。

加藤評議員長 ありがとうございます。

— 休憩（１５：１０～１５：２５） —

２．懇談（評価及び提言）

加藤評議員長の司会により懇談を行った。

加藤評議員長 時間になりましたので、本日評議員長としてこの後のセクションの司会をさせて

いただきます、弘前大学の加藤でございます。どうぞ、よろしく願いいたします。
懇談の方に移りたいと思うのですが、これは何時までに終わればよろしいでしょうか。

学校（深田総務課長） 16時45分頃までをお願いしたいと思います。

加藤評議員長 45分までいっても大丈夫ですか。

学校（深田総務課長） はい。よろしく願いいたします。

加藤評議員長 はい。分かりました。

加藤評議員長 当初予定は90分位とのことでしたけれども、少し短縮する位の感じでこれまでの全体の現況等の説明とご報告などをお伺いしまして、それを基に懇談、若しくは、先ほどのお話への提言とか、そういうものがあれば、皆さんの方からご意見を頂戴したいと思いますのですが、如何でございましょう。

坂本評議員 私の方から教育改善活動の件に関して、一つお伺いしたいと思います。本日の資料の中にも、ご説明の中にもありましたけれども、平成30年度に認証評価を受けられるということで、本日宿題って言うか評価表とか出ておりますけれども、その準備等で非常に大変な作業をやられているのだという風に理解しております。

非常に素晴らしい活動されているなと思ったのですが、その中で、恐らく評価の審査の時に、PDCAがどれだけうまく回っているかというのが問われることになろうかと思えます。

PDCAと一言で申し上げましても、沢山のことがあると思えます。実は先日頂いた資料の中に、学生のアンケート結果を例えば教員にフィードバックするという場面があるのですが、それは平成28年度の状況として記述されておりますけれども、実際、そのフィードバックしたものをどのように検証して、その改善活動に結びつけているかと言うのを、平成29年度そして平成30年度の審査に向けてどのような活動をされようとしているのかということをお伺いしたいなと思いました。

加藤評議員長 誰かコメント出来ますでしょうか。

学校（武尾認証評価対応委員会委員長） 正にご指摘のとおりでございまして、今まで、学生の声ですとか、保護者懇談会を通じての保護者の方々のご意見、保護者の声ということで保護者の方々の集いの中で出てきたいろんな意見を纏めていただいて、それに対して学校側で回答していくというようなことをしておりまして、その中から、例えば4学期制の、先ほどの秋学期への対応にしても今改善しておりますし、幾つかそういうところを取りあげようとはしておりますが、全ての点について、きっちり全部システムが出来ているところまでは、まだ、なかなかいっていません。

それで、今回の自己点検評価でかなりの詳細な項目について、それぞれで見直しましたので、その中から、学生の声で出てきているものもありますし、我々の中でここは少し改善しなきゃいけないということも出てきておりますので、この評議員会を

終えて今年度の自己点検評価が確定した後、それを基に来年度に向けて見直しをしなければいけないというところが、少しずつ出てきているところです。

ですから、全体としてのそのPDCA委員会で回していくための起点にするべき自己点検評価書が、今纏まりつつあるというところという風に考えております。

ですから、アンケートの結果についても、保護者の方々に対しては学校での対応を考えて回答しておりますが、それ以外の卒業生のアンケートですとか、そういう風なものをどんな風に活かしていくかというのは、まだこれから考えていかなければいけないというところは残っている、まだあると思っております。

坂本評議員 ありがとうございます。説明の中には認証評価の基準が大きく変わったということで話されておりました。我々の大学の方でもそれを認識しておりまして、その中の、非常にちょっと見過ごしやすいポイントの一つに、単なるPDCAを回しているだけではなくて、それを組織としてどのように検証して次に繋げていくかっていうのが問われるという風に伺っております。私達も、学生のアンケート結果のフィードバックというのが有ったのですけれども、それを我々の大学の方では、教務委員会で各学科のFDの活動を全部集めて、みんなが集まっているところで委員会としてそれを点検して、もう一回学科にフィードバックするというような形を取っているのですけれども、それでもまだちょっと何か、本当にその改善に繋がっているのかという疑問が、常に付きまとって来てですね、今、高専さんでは、どのようにやられようとしているのかなと思いついた次第です。どうもありがとうございます。

加藤評議員長 坂本先生のご指摘は、かなり厳しいお話しになるんですね。あの、評価書を書く側、評価を受ける側としてそれを描くのは非常に難しいということなんですけども。あの、我々はそういうのをどういう風に考えたかっていうと、やはりその、確かに声を聞いていますっていうことが検証されていけば良い。ようするに、これはこの声に基づいてこう対処しましたっていうことがでてくれば、それは認められたんだという風に理解しております。全てのもの全て吸収して、全て咀嚼して出したっていう風には出来ないですね。学生のアンケートなんて、最悪のものもありますからね。で、保護者のも最近ひどいものもありますので、必ずしもそれを受けて全てやったというわけではなくて、その提言についてこういう風に対応したっていうことを書けば、僕は確か認証評価では良かったんだという風に理解しているんですけど。たぶん、書いた側はそういう風に理解しているんですけど、その結果が少なくとも段階評価でしか返ってきませんので、それを見て評価されたんだというのは、なかなかこちらもしづらいものがあるのです。

あの、割とオーバーに働き、がちなんですね、あの認証評価のあれ。でも、項目が細かくなったとしてもそれほどオーバーでは無いっていう事が、最近出てきた評価結果にでてますよね。これを見ている限りは、ポイントをちゃんと押さえれば、それ以上のことはないっていう風に僕は受け止めさせていただいたということなんですけど。

是非ともあの、今度受けられるということですので、そのポイントを外さないようにやっていただければ、それほど苦勞することは無いんだというふうに、僕は思いました。

加藤評議員長 他に何かございますでしょうか。

石橋評議員 学生の就職、進学について、ちょっと質問したいんですけど。

進学率も高まっている、就職の状況も今非常に良いということなのですが、地元の企業さんの声を聞くと、高専の卒業生を採用したいと、非常に高いスキル、能力のある学生さんを採用したいという声を非常に聞きます。それから、先ほどのCOC事業のなかでも地域の貢献というような話もございました。

それと進学の絡みというかですね、基本的には中学校を卒業して入学して、その段階で進学を希望しているというような調査というかですね、そういうアンケートとか、そういうのはあるのでしょうか。

大学の方に編入する、或いは専攻科を修了して大学院に進学とか。その進路っていうのは、大体どのあたりで皆さん判断なさるのか教えていただければ。

学校（圓山校長） あの、ほんとに地元の方との懇談会に行くと、今年も高専の人来てくれなかったんですよーと、こう恨み節のようなこと言われまして、大変心苦しゅうございます。実際、今年の実績ですと、ま、平均で求人倍率が30倍でございますので、ま、ちょっと宝くじっぽいな〜というところもございます。

それからあの、昔はですね、高専っていうのは、本科5年で卒業して非常に良質な労働力、尚かつ給料も安いというのが基本的な考え方だったところです。

本校はですね、あの、これは学生の、保護者の家庭事情とか、本人達のモチベーションいろいろございますが、やはり本校の学生は、我々としては手塩にかけて育ててございますので、もしチャンスがあれば、先ほどちょっとデータをお見せしましたが、ほとんどが東北大とかですね、筑波大とか東工大に行っているわけで、そこでまた、新しいキャリアをアップして世界に貢献するというのも重要だと考えています。

それから、実は高専で編入若しくは専攻科から大学院に行った学生の博士課程への進学率が非常に高うございまして、東北大のデータでいうと学部から上がった学生の4倍ぐらい博士に進学します。つまり、アカデミックに行くことが、非常に多いですね。ですから、いろいろなチャンスを本校では与えたいと、こういう風に考えておりまして、そういう風な指導をしております。ただ、先ほど申しましたいつ頃からというのは、本校はかなり遅れてございまして、大体3年生ぐらいからつらつら考え、3年生でも考えていなくて4年生位から慌ててどこ行こうかみたいな、そんな学生達も居るんですね。ですから先ほど申しました教育支援、来年度に立ち上げる予定でございますが、もっと早期に自分たちがどういう風なキャリアを考えるのかというのを、まあ2年生ぐらいの段階から先輩の話聞かせるとかいろんな形で知識を入れて、学生達には3年生までには就職か進学かを大体決めてもらい、進学する学生はそれだけの勉強をしないと本校の授業だけでは足りませんので、そういう風なことも含めた進学指導、それから就職指導をしていきたいと考えてございます。

それから、地元の企業にやるということで、後ろのスクリーンにも書いてありますが、キャリア教育というのをやってから実は地元の企業に残っている率が非常に高くなっておりますので、こういう風な形で地元の企業にも貢献したいということと、更に、これまた絵に描いた餅でございましてまだ構想の段階でございまして、先ほど申しましたように、関東に出た卒業生、それも東北大学出て、編入した大学出て、大学

院出て関東の会社には行ったけれど、親御さんの理由とかで戻って来なければならぬとか、会社面白くないから戻ってくるとかっていう時に、職安に行かないで、本校の、あるそういう風なネットワークのところにアクセスして、地元の企業さんがこういう人材を欲しいんだというのとマッチングすることが出来れば、そういう形でも地元企業にも貢献出来ますし、本校の卒業生もちゃんと教育を受けて、それで関東とか東海地区の企業で腕を磨いてキャリアもってきた学生が、なんか普通の職安に行って普通の仕事っていうのはとっても可哀想ですし、我々としてはもったいないことなので、そういう風な組織を作りたいというのを、今、願望の段階ではございますが、検討を始めているという段階でございます。

加藤評議員長 今のお話ですね、大学でやはり、離職した場合、卒業生に対してうち（弘前大学）のキャリアセンターっていうのは対応出来ないんですね。

学校（圓山校長） それは出来ません。法律的に無理なんですね。ですから、いわゆる任意団体を作る、財団とか、そういうようなもので行う。本校でそれをやりますと、就業規則とかの目的違反で、作業を圧迫するとかそういう法律上の問題ありますので表だっては、勿論出来ない。新卒の学生にはいろいろ支援は出来ますが、卒業した学生には出来ないのです。東大でもそういうのは、同窓会組織等の、そういうふうな組織がやっているようです。ですから、そういうふうな形で地元企業とですね、あと地域、行政等のご支援をいただいて、ちょっと別な組織を作らせて頂くということではないかと、そういうふうにご考えてございます。

加藤評議員長 是非とも、そういうのを成功させて頂ければ有り難いと思います。

池田評議員代理（宮本） 今の圓山校長先生のお話は非常に有り難いお話です。あの、実例としてですね、実は今年の5月に高専さんの卒業生がこちらに帰ってきて、いろんな職探しをしたあげく、人材紹介会社経由でちょっとうちの方にご紹介があったので、是非これはっていうところで採用させて頂いたのですけれど。

そういうことから、いろんなOB会とかそういうネットワークがもしあるのであれば、そういう情報をOBの方に与えて、もしそういうチャンスがあったなら、こんな企業あるんだなというのを知って頂くっていうだけでも、全く知らない会社さんの情報を入手するよりは、こんな会社いい会社有るよっていうか、実際の情報入ってくると、なんか情報としてはフェイクじゃなくて、正しい情報として伝わっていくんじゃないかと思えます。そういう中で、いろんな選択肢として考えていただけると非常に有り難いなと思っていますので、そういうふうに少しネットワーク広げていただけるということに関しては、非常に有り難いなと思っていますので、ちょっと期待したいなと思っています。

学校（圓山校長） 正におっしゃるようなことを考えさせていただいておまして、やはり信用のある、信用のあるっていうか、フェイクじゃない情報で、ネットワーク、OBのネットワーク、これから構築しなければいけませんけど、OBのネットワークをそういう形で、戻ってきたい時にそこにアクセスしたらいろんな企業があって、それは個別

にやることになると思いますが、情報を繋ぐというふうな役割だけでもやれば、これは企業さんにも貢献するし、それから本校の学生達もさっき言いました職安とか、それからさっき言った人材派遣会社とか、いろんなもの経由して、それで、何かあの、本来ちょっと違うなっていう会社に入ってまた離職するとかってなるよりは、やはり、そういうふうなあの、高専と付き合いのある企業さんとか、地域社会の行政との人達の情報をそういうところで繋げるだけでもずいぶん違うのかな〜と思います。

それは、地方創世の一つのUターンとかIターンとか、あともう一つは、私はシルバーターンを考えていまして、60歳とか50何歳で役職退職なんかで戻って来たけど仕事無いよな〜とかってビル掃除なんか冗談じゃないと思うんですが、そういう方でも是非っていうふうな起業さんも多分お有りになると思うので、そういうのも含めたネットワークが出来れば、本校の卒業生が地域にちゃんと貢献できる、新卒だけではなくて、そういう形で貢献できると卒業生も嬉しいし、地元も私は嬉しいかな〜というのを今ちょっと模索している段階でございます。まだ、形にはなってございませんので、そのうちご相談にあがるかもしれませんが、その時はよろしく願います。

池田評議員代理（宮本） 応援はしますので。

大平評議員 うちの方（八戸市）は無料職業紹介所というものを持っていまして、誘致企業さんであるとかそういうところで、こういう求人斡旋というのをやっています。

そこを通じてやっぱり就職した方々あります。もう一つ去年から始めたのが、移住支援というものがございまして、青森、岩手、秋田以外のところから八戸の企業に就職して住んで貰えれば、面接の交通費とか或いは引っ越し代とか、雇ったところには奨励金も出すと、そこまでやってやっと少しずつ成果も見えて来たのかな、という感じですよ。

うちの方今商工労働部の中に産業労政課というところがあります。そこは企業誘致のグループと雇用対策のグループが入っているので、何かあればうちでも企業さん結構知っているんで、こんな方いますけどどうですかと、それはもう、全くどこも通さずに我々そんなこともやっていますので、是非うちの方の担当のところは先生のところのご担当の方来ていただいて、ちょっと相談していただければ有り難いと思います。

学校（圓山校長） もちろん行政の支援もいただきながら、本校の卒業生或いは新卒の学生のですね。

地元に縛り付けるという意味ではなくて、例えば、キャリア支援のこの企業説明会やったら就職率が上がったんですね。地元への定着率が上がったんですが、じゃあ、どういうことかという、学生達は情報が無いんですね。あの、さっき言ったフェイクの情報はいっぱい流れていて、まあ何だかわからない。そこで、行くのはやっぱりテレビによくでていたような企業さんだとか、もう誰でもが名前を知っているようなところに取り敢えず行くみたいなこと考えて、ま、それでも行けるんですけども、実はその大企業っていうのは、高専は短大卒でしか採らないので、そういう形でキャリアパスがかなり上の方がどん詰まりになっちゃうんですね。ま、よっぽどの例外を除けばの話です。

ですから、そうことでは無くて先ほど申しました大学院に行ってからというのは、

そういう訳で、大学まで行って、それで、そういうところに行く。で、キャリア積んだらまた戻ってくる。

それから、実は学生達が地元でそういう企業があるっていうのを以外と知らなくて、そして、いったなら面白い事やっていそうだって、じゃあ、東京なんか行くよりこっちの方がいいよね何て言ってそれで行っちゃう。一人行くと先輩と後輩の繋がりできるので何年か続けて行くとか、そういうふうな事もございますので、やはり地元の企業に、本校の学生に地元の企業のいろんな良い面とかそういうふうなものを出していただいて、学生達を魅力で引きつけていただけると大変ありがたいなど、これは現役の場合でございますが。そう考えている次第でございます。

石橋評議員 正にいろんな場面で、地元の企業の学生さんに対する、或いは工業高校の生徒さんでもそうですけれども、PR不足だっていうのはいろんな場面で正にそのとおりだと思います。

吉田評議員 関連しまして、企業の方はどうしても人手不足ということで、何とか人を採用したいということで活動しているわけですが、新規学卒者を重点的に採ってきたところも今採れなくなってきたので、これからはどうしても、Uターンとかそういう人達も採りたいということで、そちらの方にも力を入れようという、そういう企業が出てきていますし、実際、今社長さん方もそういう話をしているという中で、今校長先生がおっしゃったそういう取り組みというのは、大変期待をしたいというふうに思っております。ただ、それと併せましてやはり、地元にもう一回目を向けて貰うためにも、八戸にいる間と言いますか、学生の時から八戸のことを知って貰うというか、そういう切っ掛けになるような授業とかカリキュラムもですね、たぶん今もやっているかと思うんですが、これからもどんどん力を入れていただければありがたいということです。

学校（圓山校長） 大変有り難いコメント、ありがとうございます。今おっしゃるとおりでございます。先ほど申しました秋学期が、自主探究というプロジェクト研究をやる時間なのですが、これを作るために本校はとっても大きな犠牲を払っていると思っております。

普通だったら、年がら年中授業やって勉強やって詰め込みやっておけば、それなりの優秀な学生達が世の中に出て行って、企業さんたちにも、いや～なかなか高専の人たちは頑張っていますねということなのですが、我々は敢えて秋学期を空けて、空けるということは他に寄せるということなので、学生達も先生方もとっても大変です。

でもその時間は宝の時間だと思っていまして、先ほど言いました共通科目、共通時間というところで、キャリア支援だとか、今言った就職に関する情報だとか、そういうふうなものをどんどん入れて、どんどんと言ってもそんなに入らないんですけれども、そういうふうなものを入れながら、あそこはゴールデンタイムだと思っておりますので、今おっしゃられた企業紹介、それから進学で紹介、それから各大学の先生方に今来ていただいてこんな研究やっていますよとか、それと同じような企業バージョンでうちはこんな研究やっているんだと、企業説明会の1人10分とかじゃなくてもう少し長い時間を割り当てられての説明、それで学生達はそれに興味を持ってくれ

ば、あっこれは良いかなと思ってもらえるかもしれないですね。そういうふうなチャンスは是非作りたいなと思っておりますので、その時にはまたご支援をいただければ大変有り難いなと思っています。

加藤評議員長 他に何かございますでしょうか。

吉田評議員 子供の数がこれから減って、もう既に減ってきているなかで、学生を如何に確保するかというのは非常に大事な問題かなというふうに思うのですが、中学校に行つての説明会とかいろんなことをされていますが、その中で、高専の強みって言いますか、高校とはこういうところが違うんだよとか、その辺は、中学生って言いますか親御さんにどのように説明をしているのかなというところをおしえてください。

学校（圓山校長） 本校、北海道の高専等に比べると何か偏差値高いらしいんですね。入るの難しいです。その一つの大きな理由は、先ほど申しました進学率になります。

やはり、親御さん達は、東大とか東北大とか北大とかに将来入れるというふうなことを実は知らないんですね、ほとんど。まあ、就職100%っていうのはみんな知っているんですけど。あと、何かどうも高専って頭の良い中学生がいく学校みたいだよっていうみたいな感じはあるんですが具体的にどうなのかというと、例えば去年の実績で言うと、大学院までの進学率を考えた場合にうちは進学希望者の40%が、ただそれ特異点なので去年だけなのかもしれませんけれども、40%が旧帝大プラス筑波大学と東工大に入っています。八戸高校はそういうふうなスケールからいうと20%ぐらいの方達が入っている。それでも十分高いのですけど。ですから、ある意味で普通高校と同じぐらいの進学校であると言えます。

それから、就職を希望すれば、先ほど言いましたように求人倍率30倍ですから、かなりいろんなチョイスが出来るという意味での非常にお得な学校だということを、実は中学生の親御さんあんまり知らないし、それから進路指導の先生もやはり八高とか青高とか弘前高校とかに入れた方がよいというふうな形で、そういう指導される場合もあるので。

これは、理工系が好きで物作りが好きで、先ほどポリシーでも申しましたけども勉強が出来るだけじゃダメで、そういうふうなものを持っている学生だったら、もう早いうちから専門教育をやって、それで好きなことがやれるような環境で、あと、尚かつ上の大学とか博士課程までいけますので、いろんなキャリアパスありますが、そういうことを知っていただいて、何とか少子化のなかでも倍率というか、まあ、ここに書いているのは1.3、実質倍率1.3なんですけど、これをもっと上げて、もっと入るのに難しい学校になったら嬉しいなっていうのは、我々が今考えておるところです。

加瀬評議員 中学校の立場でちょっとお話ししますが、今あったお話しが、全くそのとおりだと思います。まず、15歳の段階で自分の得意分野が何なのかっていうのを、やっぱり判断する難しさっていうのが勿論あってですね、どうしても、県立高校の方であれば、成績が良い子達は普通科の学校に行つて、それから進路を考えようというふうな場合が多いです。

高専は、第一希望に書いて貰うためには子供が本当にこう自分が好きなことが出来るのかとか、あと、保護者としてはやっぱり安心感っていうか、将来の進路にこう繋がるということまでちゃんと分かったうえで進学させたいとか、あと、進路指導の先生も、学校で大体3年生の先生の副主任とかがやる場合が多いんですけども、必ずしも理工系が得意な先生じゃなくてですね、高専の説明を聞いてもなかなか魅力が伝わらない場合もあると思います。

まず、子供達対象には体験入学、化学の学校とかですね、そういうのやっていただいたり、保護者については、体験入学の時には一緒に来る保護者もいると思いますけれども、なかなかこう高専の良さっていうのをどう伝えるかっていうのが課題なのかなと思います。それで、先ほど新聞の切り抜き見ていたんですけども、こういう広報活動っていうか、学校がこうですよって言うほかに学校のニュースとかがいっぱい流れることによって、まず、高専ブランドって言えば変ですけども、そういうイメージが上がってくるかなという感じでお伺いしていました。

まず、中学校の教員の立場で、私、理科の教育界、理科教育の研究会の会長ですので、高専の魅力をもっと伝えていければ良いなと思っています。先生方対象の高専の現状みたいなのが伝わるような形になれば良いのかなと思って、今お伺いしていました。

学校（圓山校長） 本当に、大変有益なコメントありがとうございます。私ども正にそれを考えておまして、やっぱり先生方へのアピール、それから生徒さん達へのアピール、それから親御さん達へのアピールもまだ足りない。ただ、最近嬉しいのは、意識的に、別にあの隠しているわけじゃ無いんですけども、意識的にいろんな学生達の活躍をメディアに流して、それでメディアがとるかとかは別な話しですけど、それで、結構デーリーとか取り上げていただいて、またそれが、例えば八戸市の委員会なんかに行くとか全然関係ない委員の先生から、いや～校長先生最近学生ががんばっているね～って言っていただく、ほんと私嬉しいんですね。まあ、そういうふうなブランド化。それから今申しましたように、実は子供達はやっぱり、うちの息子もそうでしたけども、やっぱり中学生時代にはまだ自分の方向を有る程度決められないって子も多いんですが、でも、実はその子達ももの凄く理科が好きだとか、ものづくり好きだっていうのは持っているんだけど、まず、取り敢えずは普通高校に入ってっていうふうに考える生徒さんも多いので、そこでもう少し高専の魅力をもっと知っていただいて、それで優秀な学生がそういう風な形で来ていただけるような方策をとれると、とっても嬉しいなと考えている。先生のコメント非常に参考にさせていただきたいと思いますので、今後ともよろしくお願ひいたします。

加藤評議員長 他にいかがですか。

大澤評議員 あの、校長おっしゃったアドミッションポリシーですか。その中で一番最初にですね、資料2の14ページになりますけども、他人への思いやりができ責任ある行動が取れる人というのがあります。これは、私非常に大事なことだなと思っております。と言うのは、どんな社会でも、その社会を構成する人は互いに協力し合って成り立っていると。それで、やっぱり協力をするためには、お互い他人を尊重し合うというこ

とが大事だと思うんですね。それによって社会性も身につけていくし、社会に出てからも安心して歩んでいけると私思っているんですけど。この高専では、そういった、何ていいますか、その姿勢をもってもらうために、意識的に何か学生達に行っていることがあればおしえて貰いたい。

学校（圓山校長） 私がこの前の校長講話でお話ししたのですが、本校の学生はちょっと恥ずかしいのもあって挨拶がまともに出来ないのでもまず挨拶から。それから、バスの運転手さんに、それはちゃんと運転してくれた場合の話ですけども、どうもありがとうございましたと声をかけるところからまずやりましょうと。

挨拶出来ると出来ないでは、この前の校長講話で言ったのは、生涯年収がたぶん数億円違うよって話しをしたんですね。ま、そういう場合も有るわけです。ちゃんと挨拶が出来れば部長になるところを、出来ないために課長で止まってというのがいっぱいありますし、そういうふうな役職になって社長になる人と課長止まりでは全然違う。

その辺は、先生がおっしゃるように社会性がちゃんと身につけているとか、仕事が出来るといふのは当たり前なので、その位の人になると。だから、そういうふうなもの大事ですよっていうふうな形で教育的な配慮、それから、そういうしつけですね。そういうふうなものを、ま、これだけではなくて学生主事の河村先生の方からもコメントあるかもしれませんが、そういう日頃の所作とか、仕事が出来て勉強が出来るだけではダメだよって話しはしております。

それから、もう一つ重要なのは、実は高専というのは、1年生は混合クラスなんですけど、2年生からずっと4年間、下手すると専攻科までいくと6年間クラス変わりません。つまり、同じそのコミュニティのなかでやるためには思いやりだとか、それからチームワークだとかが無いと、高専って生き残れないような社会になっているみたいで、そういうなかでの仲間内のチームワークとか、そういう風なものについては非常に大学とはかなり違っているなというのが、私の印象でございます。

そういう形で、形になって出てくるのが、例えば先ほど申しました運動会とかですね、それから文化祭ですね、高専祭と申します。ああいうところの出しものなんかは、そのクラスごとに全部みんなで企画して協力して、そしてものごとを作り上げるというチームワークというのがもの凄く発揮されて、学生達もすごく一所懸命やるんです。

ああいうふうなものを通しての社会性っていうのは、やはり高専独自の良い点なのかなと私は考えておりますが、先ほど大澤先生がおっしゃった、公人としてのちゃんとした礼節とかそういうのも、これからちゃんとやっていかなきゃいけないなと思っておりますが、ほかの先生何かコメントがあれば。

学校（河村学生主事） 元々伝統的に、高専でやっぱり寮生活と課外活動っていうのは、専門教育と別のやっぱり教育の柱というふうに言われてきておまして、その中で大分、共同生活であるとか、協調して何かをやる、それから優秀な学生、進学するにしても受験勉強で汲々とするということではなくて、いろんな研究活動である今のアクティブラーニングにしても、何かこう共同でやるというところには結構価値を覚えてきているというふうに考えております。

そこら辺をやっぱり大事にしていくというのは一つ大事なことで、その一方で社会環境員として見ますと、もうちょっと社会性とか人権に対する意識とか、そういうもの

を何とか、もうこれは知識と言うよりはリテラシーという形で何とか維持していきたいと考えているのが現在のところです。

加藤評議員長 他に何かございますでしょうか。

石藤評議員 4学期制導入と秋学期、その自主探究学習についてですけれども、うちの新聞（デーリー東北）には、12月4日付け、このようにポスターコンクール、紹介されていて、私評議員初めてなもので、よくやっているんだなあと見ていたら、今日の報告ではいろんな課題が浮かび上がってきた。

実はうちの縁のあるものが今高専に入っておるんですけれども、夏休みが長いわね〜って言われまして、で、国立高専だからそうなんだろうっていうことになって、ま、親御さんっていうか縁者の方ではそういう話しをしていたんですが、資料を見てこういうことしていたんだということでよく分かりましたけれども、やはりこの改善点にあるように何かの縛りとかグループ制で研究するとか、そういうのは必要だなあというふうに思いました、この改善点は非常に評価されるものだと思います。

それで、やはり高専の魅力を中学生にアピールするためにも、こういう風な記事をですね、うちと云いますかマスコミと意思を疎通にして、密にしてやっていければと思います。

それで、1年生の場合、その自主探究学習でのテーマ設定というのは、いわば高校1年生みたいな感じの方が自分でテーマを見つけるというのは、非常に難しいかなって思うんですけれども、やはりカリキュラムのコースの中での、この誘導というものには有るものなのかどうなのか、そこをお聞かせください。

学校（圓山校長） 大変あの、いろいろ取り上げていただきましてありがとうございます。我々としても大変有り難くて、ああいう風にさっき言ったのは、良い面も悪い面も両方有るのでちょっと悪い面を強調させていただいたんですが、自主探究はとっても凄いと思っています。

これ、さっきちょっとお話ししましたけど夏休みの自由研究じゃないんです。何が違うのかな〜と、私も1年間ちょっと見させて貰いましたが、学生達はそのテーマについてディスカッションをしながら自分でポリッシュアップしていく、これ、自由研究じゃないです。

夏休みに市役所に行って、教えてくださいとかってレポート書いてみんなの前で発表するのは全然訳が違う。ただその、先ほど言ったテーマの件です。15歳の学生達、高1、中学を出たばかり。あの子達がどんなテーマを選ぶのか、何か誘導するのか、しないんです。ただ、時々、僕は世界を助けますとか、こんな物爆発させますとかってというのは危ないので教員がやめさせます。ですが、例えば、今回デーリーさんにも取り上げていただいた野球。例えばの例なんですけど、カーブとストレートはどっちが特か研究しますって、そんなの選んできたんですね。1年生です。それで、そうするとその1年生、みんなに袋だたきにあうんですね。そんなの打つ人とあれで全然違うじゃない、どうやって定量的にやるんですか。その翌週、何かそれっぽい、5回打って平均を取りますとか、何かそんな、少し科学になってくるんですね。ただ、テーマ自身は自分で何でも選んで、それも凄く面白いテーマを彼ら見つけてきたり、

あと、発表している段階で誰かがスマホいじって、こんなのもう誰かやっているよと
かって、彼ら検索が速いので。そうするともうみんなの前で大恥かくので、そういう
ときには、こういう先行研究有りますが、私はこのところがオリジナルですとかって
やりながら、ディスカッションしながらテーマが変わってくる。

それからもう一つびっくりしたことは、さっき1年生に出来るのかってというのは、
私ももの凄く不安って言うか半信半疑でした。で、他高専の校長先生、全国の校長先
生に見に来てくださっていったら数校の校長先生がお忙しいところ来てくださっ
て、1年生の発表を聞いてくださったんですね。そしたら、その1年生がその校長先
生相手に、他校の校長先生相手にがががディスカッションしたそうです。そのうち、
その校長先生が熱くなって、つばとばしてなんか議論をしちゃいましたなんて言うぐ
らい。だから、ほんとに15歳って凄いなって思いました。

つまり、ああいう風なものをやることによって、彼らの、なんかこう普通だったら
考えられないような、結構高度なところまで、彼らはやる能力があるんだ。たったの
半年しかたっていないんです入学してから。11月のはじめに発表会があったので、
入ってから半年しか経たなくて尚かつ数ヶ月しかそういうトレーニングをしない学
生が、ちゃんとそういうふうな、校長先生でも研究者であられる方が多いのでそう
いう人たちの専門的な話しも含めて、自分のできる範囲でちゃんと議論が出来る。そ
ういうふうな問題をちゃんと見つけて、それをちゃんとやれる能力が実はああいう若い
世代に有るんだって言うことが、校長自身も驚いておられて、これをどうやって、
これから伸ばしていくのかってというのは、非常に楽しみなことではございます。

そのために我々は他のことを犠牲にして、先生方忙しくてもう非常に大変なんです
けども、何とかそれに耐えていただいてやらしてもらっているっていうのがあるのは
現状でございます。お知り合いの方にそれを伝えていただいてももらえれば大変有り難
いと思います。

石藤評議員 引き続きですけれども、ちょっと場違いな質問かもしれませんが、もし、間違っ
たら削除してください。

実は、この寮に入るのに引っ越しを手伝いました。女子寮だったので途中までし
か行かなかったんですけれども、率直に言うと随分古い建物だな～という印象を受け
ました。

この高専そのものは、私も小さい時からある学校なので、その時以来の物なのかな
というふうに想像はしたんですけれども、そういう施設の設備の更新っていいですか、
それは国の予算によるんでしょうけれども、例えば寮なんかこれからどういうふうに、
学習環境の整備といいますかですね、そういうのをどう進めていくのかってという質問
です。

学校（中村寮務主事） 寮務主事の中村です。寮の古いことについてですが、第一期校が改修と
かというようなところはなかなか今、ようするに機構本部の方からのお金、予算がな
かなか貰えない状況で、今内部のところを少しずつ良くしていくという形なので、外
側にはあんまり見えないところがあります。

それで、今寮生がほんとに不便に感じているっていうのは、もういくつか確認して
いまして、一応来年度はそこら辺のところを営繕要求という形で要求する形にしてい

ると伺っています。必要だというところをやっていく、少しずつやっていくという状況です。

石藤評議員 分かりました。

加藤評議員長 あの、余分な話しですけど工学部長会議で文科省に説明を聞くわけです。そうするとその時に何を言われるかといったら、営繕的なものは一切つかないです今の状況では。それでは国立大もやっていけないのでこれから計画的に出してください、それを財務にどう働きかけるか。ようは文科省から出したいのだけれども、財務ではねられるっていう状況が今続いているんです。

という点で今のお話しですと、非常にその大規模改修が難しいとなると耐震工事に絡めるしか方法が無いので、それは非常に難しいんだと思っています。ただ親御さんの気持ちはよく分かるんです。私も娘3人いて、二人寮に入っていましたから。そういう点で寮はきれいであってほしいとは思うのは確かなんですけど、これだけ年をとってみるとですね、自分が過ごした研究施設とかそういうものが、ぼろくても何かそれがよかったんですね。不思議とそういうのが思い出として良かった。あれはこうだったよね、ああだったよねって、寮生活をされた方も結構皆さんそうなんです。だから古いままで良いって言っているわけではないんですけど、古いものには古いものの味わいがあるっていう親御さんの言い方もあってしかるべきかなっていう。この年になって言っているんです、その時はそういうことは絶対言いませんけど。そういうのもちょっと感じた今日この頃っていう感じですね。

よく大学でも研究室きれいにもっとしてくれ、エアコンもっと入れてくれっていうような話しをされるんですけど、自分が過ごした環境を考えても、それが楽しかったかどうかっていうような昔話をしてごまかしているのが今の現状、申し訳ないとは思いますが、それでも着実に少しずつでも改善していけば、ご納得いただけるかということやらしていただいているのが、少なくとも、多分圓山先生なら多分そういうことは充分ご存じだと思って、おやりになられるんだと思うんですけどね。

学校（圓山校長） 寮務主事が申したとおり予算が無いんですね。で、さっき正におっしゃったとおり、機構にこの前行ってきたら新規は認めませんと、びしっと言われるんですね。

ですから本当に辛いんですが、ただ我々夢を持ちまして、寮をきれいにするだけではなくもっと新しい形のような。実は東北大学でそういうのは作って来たので、そういう風なものをやはり高専とか大学なんかでも広めていきたいと思う気持ちは有るので、そういう風な努力はさせていただいています。

ただ、寮務主事が申しましていますように、学生達がいろいろ不便なものは教職員で知恵を絞って少しずつ改善をしていると、それは止めないでやっていますので、見てくれは若干ぼろなんですけども中はそれなりに、無茶苦茶快適では無いかもかもしれませんが、そういう形で使っているように我々努力しているということでご理解いただければと思います。

加藤評議員長 他に何かございますでしょうか。

池田評議員代理（宮本） これは高専さんの特許にはなるんじゃないかと思うんですけども、非常に英語能力の向上っていうんですか、実践的、プレゼンテーションでも英語を使って発表なさるとか、あとトイックの試験を受けさせるとか。

基本的な英語能力を上げるっていうことをやってらっしゃったおかげで、多分、この国際交流活動っていうところに結びついてるんじゃないかと思うんです。そういうところで英会話の自信がついて海外にも行きたい、あと、海外の留学生もまた受け入れてらっしゃるので。

こういう活動っていうのは普通高校じゃ多分出来ないと思うんですよ。すごい。グローバルな人を育てましょうって随分昔から言われていますけども、やっぱり日本人って、私もそうなんですけども、普段仕事の、通常的に英語使っていないと、やっぱり英語って話せないものですから。

普通高校でも英会話っていうのは今はやっていますけども、やっぱりこういう現場、実践に即したことが留学生も入ることによってきつとなっているんじゃないかなと思う中で、ちょっと違うんですけどこの留学生の方で、何か日本の企業に興味があるとか、そういう人達とかがっていらっしゃるのでしょうか。ちょっと違う話になっちゃって申し訳ないですけど。

学校（圓山校長） あの実際にですね、ここにきた学生は日本の企業に就職するのが多いんじゃないですか、大学院いってからほとんど日本の企業に就職ですね。ですから、みんなそういう感じで来ているんですね。

で、我々もう少し、もうちょっと踏み込みたいと思って、今密かに策略を練っておるんですが、それは先ほどの寮も関係しますけども、もう少し多様な、例えば先ほど申しましたように。

ひとつその前に説明をさせていただきますと、普通高校の場合には、例えば、何々大学と協定を結ぶなんてまずやらないっていうか、無いんですよ、そういうのは。本校は世界の10校くらいと協定を結んでいて、その協定に基づいて学生を送ったり受け入れたりしているんですね。こういうことは普通高校では絶対出来ないことで、まあ大学は普通やっているんですが、そういうふうなネットワークがちゃんとあったうえで修学旅行じゃない学生を出す。それから英語について考えると、実は英語ができるから外国に行くんじゃないかと、外国に行って自分は何かできるかなと思って行ったら全然通じないので、勉強しなきゃと思って勉強している子が多分多いと思います。あと度胸もつきますし、若いうちに行くという形でのコミュニケーション能力っていうのが溢れるということです。

それで就職に関して言うと、先ほど言いました留学生については、かなりの割合でほとんど日本の企業に就職する場合が多ございまして、国に帰って就職っていうのはそんなに多くないと私は認識しております。あの、大学院に行ってから行くって場合もありますので、なんていいますか最終就職がそういう日本だということです。本校から直接企業に行くっていうのも勿論ありますし、まあ、そうじゃない場合も多い。

我々やはりそういうふうな国際ネットワークを通じて、例えば新モンゴル高専と今非常に強い結びつきを持って学生を受け入れたり向こうに派遣したりしていますが、やはり向こうの学生も日本の企業は魅力だと思いますし、モンゴル人って凄く日本語上手なんです、言語体系同じなので。先ほど言ったモンゴルの自主探究のプログラ

ムはですね、相手側の学生は実は全部日本語で対応してくれました。この新モンゴル高専、日本語は必修なので。まあそういう形で、こういう学生たちが本校に来て基礎学力やって企業なんかも見つ、そしたら八戸に就職したいって思う学生がいるかも知れませんね。まあこういうのも、将来的には高専がそういうハブになって、いろんな仲介が出来れば、とってそういう意味での地域社会にも貢献できるし、勿論このモンゴル高専の学生諸君もキャリアアップにも繋がりますので、そういうことも考えられるというふうに今考えております。ただ、まだそれも全部絵に描いた餅でございますので、将来ということで今やっているわけではございません。

池田評議員代理（宮本） はい、ありがとうございます。結構日本企業に、大学に行ってから日本企業に就職なさっている方が多いということをお聞きして、反面うれしい、反面ちょっと残念だな～というのがあるんですけども。

留学生も実際には寮に入ることになるのでしょうか。できればですね、出来るかどうかちょっと分からないですけども、もっと八戸市を、青森県を、生活を、いろんな事を知って貰って、暮らしやすい町だなとか、住みやすい町だなとか、生き甲斐がある町だっていうのを是非留学生の方にも感じてもらって、多分そのためにはホームステイとかそういう制度を、もし八戸の中で受け入れてくれる家庭があればそういうホームステイみたいな制度で、実際の、もうちょっと地域に密着した生活をもっとなさると、もっと八戸を思って、大学院を終わってもやっぱりちょっと八戸に戻りたいなと、そういう気持ちになってくれるとちょっと有り難いなと思いました。

それともう一つ、我々八戸市民自身が留学生とふれ合う、ふれ合うチャンスを作ることによって、我々自身も多様化に近づいていくんじゃないかなあと。

要は本学の学生さんだけでなく、その周りの地域の人達も留学生とふれ合うことによって、多様性に少しずつ近づいていくんじゃないかなという風に思いましたので、ひょっとしたら、ホームステイというのは一つの良い形かもしれないなと思いました。

学校（圓山校長） ありがとうございます。あの、お金の問題もあってホームステイって凄くお金頂きますよってなったら出来ない。それから、文化が違うのでその辺はどうか～と思うんですが、でもやはりそういう形で。

ただ、高専にず～っといるわけじゃなくて、街にも出て行きますし、いろんなアクティビティも実は留学生やっているの、それについてのコメントを戸田山先生。

学校（戸田山男女共同参画委員長） はい。今度の土曜日になりますけれども、白山台公民館で留学生と遊ぼうという会を企画していただいております。本校の留学生と地元の小学生と一緒に遊びの会をするということで。もうこれで3年目か4年目くらいです。

根城公民館の方では大体6月に同じような会を、そちらの方はもうちょっと長く続けております。

また、今度のまちなか高専祭でも留学生がプレゼンテーションをする予定ということをお伺いしておりますので、できるだけいろんな機会に、留学生が街の中に出てきて街の皆さんに自分たちの文化を紹介する、或いは八戸のことを知る機会を増やしていきたいなという風に思っております。

学校（阿部国際交流センター長） 今、ホームステイについてご意見いただいてありがとうございます。実はホームステイ実施しているんですが、本校の教員そして本校の学生のお家を対象にですね、短期、長期の留学生のホームステイを時々しております。

ですから今後ですね、地域の方にもご協力いただきながら、またちょっと広めていくような方向で検討させていただきたいと思います。ありがとうございます。

加藤評議員長 ほかにございますでしょうか。私、高専さんのこういう秋学習とか、自主探究とか、こういうものについて非常に素晴らしい取組だなと思ってず〜っと見ております。

結局大学生になってもですね、4年になってもなんら変わらないっていう人がいらっしやいます。それはどんな状態であっても、それは院生になっても自分で研究出来ない方ってざらにいます。それは何が違うか、モチベーションが違う。要するに自分でやろうと思ってやったわけじゃ無い。親に言われたから、周りがそう進めるから、そうやって、なっていくって、下手するとドクターまで行った人もいます。というような、いわゆる高等教育の現状です。昔のように、やりたい人がやりたい意志を持って、こうやったというものではなくなっています。そういう点で、大学教育がどんどん基礎教育化している、学部教育が特に基礎教育化しているんです。それで、割と専門的なものは大学院に持って行こうって話しがず〜ときているんですけど、最終的にそれを学生に聞いたら、苦しみが増えるだけだと言われたんです。要は、基礎が、訳の分からない基礎が長引くから結局彼らにとっては、それは辛いことだっていうわけです。で、我々がよくよく考えてみて、我々もその学部生の時に基礎が分かっていたかということ、分かっているんですよ。最終的に高学年になって、あ、自分の基礎はダメだったんだということが分かって初めて自分で勉強して、それで初めてものになっていくんですよ。それで、偉い先生方が言っていたのがそういうことかって言うのを、初めて高学年になって理解する。それは自分がやったから理解できるようになったんです。そういう取組を、高専の方では15才っていう形でやっているようなものだというふうに僕は理解している。

ついこの間、日曜日だったか土曜日だったか忘れちゃったけども、読売新聞の社説で、いわゆる高等教育の無料化というのが出ておりました。それを読まさせていただいた時に、そんな訳の分からない大学生増やしてどうするのっていう、目的意識もない、それこそ無駄である、そういうお話しが書かれていました。まさに、そのとおりだと思います。そういう現場に直面している我々としては、やっぱりそうだと思います。

そういう点では、本当にもっと、本当に15歳でなくても、12歳でも出来るのかもしれない。そういう意味では、それこそ中学生レベルでそういう取組が多分今後始まるんですよ。そういう取組をどんどん入れていくようになるんだと。

そういう風にやっていると、何とか自分から動こうとする人が増えてくれるんじゃないかな〜と思うんです。

先ほど圓山先生が言われた、言われたことにあったと思うんですけども、いわゆるその閉鎖環境でそういう風に育てると、いわゆる社会的マナーというのが身につかない。そういう点では、大学生の方がいろいろ揉まれた後での身につけ方をするので、いわゆる私からすると、飛び級でいった方から人格的にはやっぱりおかしくなるっていうのがありまして、それはあまりにも正式な発想とは合わないというのがありまし

て、そこのケアを多分、15歳の方に対しては多分これからやっていくことが大事だなと思います。本当に爆発的に伸びると思いますので、是非ともこの取り組みを見せていただいて、それで、この間の4校学術交流会みたいにもうちも大学院生にそういう成果を、自分のレベルはどの程度だっということ、あくまでこれは圧倒的な差を見せつけていただくことが、僕は一番いいそのモチベーションのはずだという風に思っています。是非ともそういう取り組みをお願いしたいですし、加瀬先生にもそういう努力を是非ともお願いしたいと思っています。

加瀬評議員 中学校でも探究的な学習ということで、総合的な学習の時間というのが、教科、道徳、あと学級活動のほかにあります。総合的な学習の時間は、探究的、あとは共同的ってというのがちょっとキーワードになっていまして、本校の1年生は今ディスカバリー・イン・八戸というテーマで、グループに分かれて探究的な学習をしています。

ただ、高専さんのように自分でテーマを見つけていってところは。ま、与えられた枠の中で、少し興味、関心が強いところを取り組んでいってというような形で進めています。

私の体験からも、以前は夏休み理科の自由研究っていうのを必ずだしていました。ただその時に、夏休みになってから自分でテーマを決めるのはかなり難しいです。必ず、夏休みに入る前に先生方がアドバイスしながら、何をやるかっていうところまで決めたくて夏休みに入って、この日は顕微鏡を使っていいですよとか、この日理科室開放しますっていう形で進めればある程度形になるっていう状況で、全くこう自分で見つけるところまでは、なかなか中学校では難しい実態もあります。

学校（圓山校長） 正におっしゃるとおりで、後ろにその日程書いてあるんですが、何を、まずテーマを選ぶというのは非常に重要で、何やっても良いんですけども、それはちゃんとサイエンスして出来るかどうかっていうのを、この夏学期の4日間、1年生は5日間使いますが、4日間を使ってそのテーマを絞り込むという作業を学生たちにはやらせる予定であります。

この時に、実は、終わらない時にはどうも先生方が考えているのは夏休みを潰して、そこでテーマを決めるということをやらせるということをやるとなるとそうなのですが、そういう風な形でのテーマ設定というのは我々非常に重要だと考えていまして、それから先、この自主探究期間になったら、そういうものをちゃんと、勿論ディスカッションを通じてテーマの内容が変わってきたり発展したりする場合有るんですが、あまり大幅には変えないというふうなシステムにするという風には考えています。

今までは秋学期だけでほとんど自主探究やって、この辺からテーマを考え出して実は11月になってもテーマが決まらんという学生もいてですね、その辺になるとこうやっつけ仕事になって、如何にも何か凄い手抜きっていうふうな話になっちゃうので、それはちょっとやめようと。

それからもう一つ。もの凄く伸びる学生は、凄く伸びます。さっき申しましたように。ところが、やっぱりこういうのが苦手な子もいるので、この人達をちゃんとセーフティーネットで陰ながら、脱落はしないようにこういうふうを支えながら、その子たちはそんなにいい成績は取らないかも知れないけど、そういう風な事をちゃんと、苦手でも決められたこときちんとやれるけどそんな創意工夫なんかあんまりやれな

いし、慣れていないって子もいますので、そういう子も対応させるようなプログラムを考えていかなければいけないっていうのを、今考えているところでございます。

どこまで理想に近づけるかまだ分かりませんが、そんなところを、今、考えています。

加藤評議員長 多分今の圓山先生の、上の者っていうのは、岡田先生の考え方からいうと割と理学っぽいかなと、自由にやらせてその想像力の爆発に期待するというようなところがやっぱり上には見られたなと。下の方にはやはり工学的な発想というのがやっぱり出てきて、いわゆるトレーニングをどう積んでいっていかっていかってことをやっぱりやらなきゃいけないし、そのボトムアップどうしていかっていかって、底上げをしていかなくちゃいけないっていう、そういうことをやっぱり意図されているんだな～という風に思います。

我々も今困るところは、その落ちこぼれた人間どうやって上げるかっていう、平均点をどうやって上げるかっていうのが一番悩むところなんです。そういう点では多分、あの場の作り方、先ほどのディスカッションなんか盛んにされる。でも、大学生にいきなりやらせても絶対出ませんので、ディスカッションしたがりませんので。

学校（圓山校長） そこがすごく面白くて、これは多分高専の特徴だと思います。

ある、これを担当している先生がぼろっとおっしゃったんですが、先生是非このグループディスカッション来てくださいよ、もの凄く面白いです、下手な国際会議より面白いですよって言うんです。それは、国際会議に出てちゃんとそういうことが出来る、うちの教員は一応そういうふうな事で研究やっていますし国際会議にも出ていますので、そういうふうな視点で国際会議のディスカッションよりずっと学生の話の方が面白いですよって言う。

こういう先生が、こうやって背中を押してやってくれるんですね。それで論旨がばらけてくると、いやいやそれ違うからこっちの方でも少し考えたらと、強制的にはしないんですがちょんちょんちょんと方向修正ができる。こういうことが出来るのも、実は本校の先生方が研究をやっているというのが、一つの大きな理由かなと後で考えていた訳なんです。

やっぱりそういうふうなので、高専で15歳からこういうのをやるというのはある意味で、逆に言うと大学生が1年生でもやれるんですがちょっと遅すぎるっていうか、そういうところもあります。15歳からそういうのを手付けられるっていうのは、高専というのは結構有り難いポジションなのかなというふうに。

あと、実験設備も分析器もみんな揃っていますから、大学と同じなので。それをみんな、学生達が自由に使うんですね。それで色んな成分分析やったり、DNA分析やったり、それで長芋のあれがどういう蘇生だとか、酵母のあれがどう変わるかとか、チーズの発酵過程のそれが分析するとどうなるかとかそういう風な。あと、スペクトルメーターっていう光の波長を分解するのを見て、これの色の成分はどうなのかとか、そんなのをやれる装置が揃っていて指導者がちゃんとして、それでディスカッションが、こういうふうにして背中押してくれる先生がいて結構激しいディスカッションが出来るというのは、とてもラッキーですけど、恵まれた環境にいたのかなと。それを岡田先生が、それが素晴らしいというふうにおっしゃったことだと思います。

加藤評議員長 弘前大学では、弘前南高校とか八戸高校とか、そういうもののいわゆる課題発表会みたいなものを大学でやっていたことがあるんですが。

去年の会議の時も申し上げましたが、我々から見るとやらされている感があるんですね。それか強烈に指導が入った感があるんですね。そうなんですよ、大人の発想だというのがすぐ分かるんです。こう発表したら、纏まりはいいよねっていう発想で、多少質問するとすぐ答えられなくなる、そういうパターン。それから、この辺でいいよねっていうやめかたをする。そういうのを見ると、これ全然違うよね、これやった事にはならないよねって、やっぱり僕らはそれではがっかりする。でも、八戸高専さんの課題のやつを見ているとそうではない、本人達が分かってやっている。

レベルはそんなに高いとは思わないんですけど、そのひかり方が違う。というふうな感じがするので、正に本当に期待かけていますので、是非ともこういうのが普及していただけると、是非とも育て方としてこういうふうに育てて頂けると、世の中幸せだな〜と思うんですけど。

他に何かございますでしょうか。

池田評議員代理（宮本） すいません。先ほどいろいろ実験設備が揃っているっていうお話があったのですが、それで、高専に「ものづくりセンター」という色んな機械加工の設備があるということ私ちょっと知らなかったんですけども、今日参加するので色んな報告書みて、ホームページを刷新したとか動画を新しくしたとかっていうのを実は見て、一応見てきて何か言わなきゃいけないかなと思って来たなかで、「ものづくりセンター」という項目があって、色んな機械加工の設備が置いてある。

実は地域の企業さんで、何か機械加工の色んな研修をしたいっていう声が別なところからあってですね、ひょっとして高専さんで使っていない期間とかに、申し入れ、相談とかすると使えるようなことになるのでしょうかということなんです。

学校（松本地域テクノセンター長） 本校では分析装置も含めまして色々な装置がありまして、「ものづくりセンター」には技術職員がおりまして、我々の作ってほしいものとか、あとは、それこそ自主探究の学生向けにいろんな加工したりする期間がございます。ただ、地元の方々若しくは一般の方々向けの開放といいますと、安全面がちょっとまだシステムとして出来上がっていないのが正直なところです。

一連としましては、委託研究でこの分析をやってくださいとか、この強度を測ってくださいっていうのは受け入れたことがございます。ただ、研修として使うっていうことになると、色々と相談していただかないと難しいのが現状なのかなと思いますけれども。

学校（赤垣企画担当副校長） 機械システムデザインコースの赤垣でございます。ただ今のご質問は、多分八戸市の高度利用技術センターさん、IPの方のお話しかないとこのように今聞いていたのですが、その依頼はきておりまして、それで今「ものづくりセンター」の方と事務の方と相談して、前向きに今検討しているところでございます。

工作機械だけをお借りして、講師の方が来て八戸市の研修をやる方の実習をすると言うお話を聞いておりましたので、それにつきましては今前向きに考えて検討してい

ますので、多分可能かなというような気はしますが、そういうことでございます。

加藤評議員長 よろしいですか。多分八工大さんの方でも取り組みされていますよね。大学は大抵開いているはずなので、そういうのをネットワークに生かしていただければ、多分やれると思いますし、大学は当然やっているはずなので、そういうところを利用されるっていうのも一つですね。別に八戸高専だけに偏る話では絶対ないですからね、こういう話は。

学校（赤垣企画担当副校長） ただ今のお話しは八戸市で開催ということで八戸市の地域でそういう対応があって、お借りできる会場を探しているっていう、そういうお話しみたいでございます。

加藤評議員長 分かりました。話も尽きないようでございますけどもほぼ時間となりましたので、ここらで閉めに入りたいと思います。

総じて、あのお話をずっとお伺いして、やはり高専の強み、高専の魅力ということに尽きるのかなというふうに、総括させていただければという風に思います。

勿論就職に関してもそうですし、それから国際交流とかに関しても、やはり本校（弘前大学）では出来ないような、そういうところもいっぱい見られております。

そういう点では八戸高専の場合には特に新しい取り組み、それからいかにブラッシュアップをしているかっていうこと、取り組まれているっていうところを理解しております。

大体こんなようなことが話しあわれたのかなと、僕の方ではちょっと勝手に考えさせていただいておりますけども、よろしいでしょうか、そんな纏めで。

ちょっと拙いまとめで申し訳ありませんけども、取りあえずこのような内容で、後で皆様方に見ていただくということになると思いますので、私の方はこれにて終了させていただきます。

あと、よろしく願いいたします。

最後に圓山校長から謝辞があった。